

User Report

航空運輸

■ エス・ジー・シー佐賀航空株式会社

社員の声をきっかけに導入し、現在は試験的に運用中。
パイロットには、意識の変化など効果が現れ始めています。

定期便でお馴染みのエアラインだけでなく、国内には50社を超える航空会社があり、医療搬送や地勢測量、遊覧、報道など、多くの事業を手がけています。今回はそんな中の1社、エス・ジー・シー佐賀航空に、アルコール検知器導入の経緯や、安全への取り組みについて伺いました。

ご利用機器



プリンター一体型測定器

ALC-mini III AC
Alcohol Recording System for Professional



導入から数ヶ月
.....

酒気がないことを記録として残したい
そんな現場の声が導入につながった

宮原：航空業界でももちろん、アルコールが残っている状態での乗務は法律で固く禁じられています。また、事業者としての体制も、例えば航空局による立ち入り検査などが定期的に行われ、運航のみならず、整備部門や管理部門まで広く調査・指導が入ります。当社では、社長直轄の安全推進室が主導し、全社的にPDCAサイクルを回しながら安全体制の向上に努めています。その中で「アルコールが残っていないことを客観的に確認する仕組みを構築したい」という声が社員から上がってきました。それまではパイロットの出勤時に、健康状態や医薬品等の服用状況などを対面で確認

取材ご協力

エス・ジー・シー佐賀航空株式会社
専務取締役・航空事業本部長
宮原 幸徳 様

〒840-2212
佐賀県佐賀市川副町大字犬井道9476
TEL 0952-46-2002 FAX 0952-46-2003



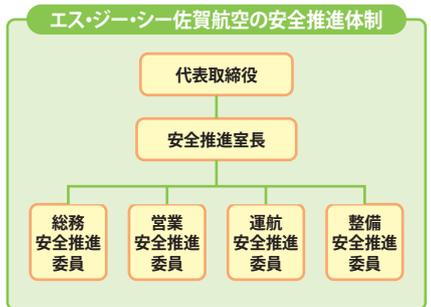
していたのですが、「果たしてそれで十分なのだろうか」と。立ち入り検査の際にも、ただ「しっかり確認しています」と答えるより、客観的な確認方法を実践することで、当社の取り組み実績をより明確に提示できます。

また、当社はパイロット養成事業も行っており、教え、育てる立場でもあるわけですから、まずは自分たち自身が襟を正そう、という意味もありました。

このことがきっかけとなり、「親会社(中山運輸:トラック輸送事業)で使っているアルコール検知器が参考になるのでは?」と話が進み、2017年初冬にALC-mini III ACを導入。出勤してきたパイロットがALC-mini III ACを使って計測し、記録する、という流れで使っています。

社員自らの提案で導入した機器ですので、アルコールチェックに対する違和感は現場には全くありません。対象となっていない整備士の中にも、自己チェックで使う人がいるほどですから(笑)。まだ導

入して数ヶ月ですが、少なくともパイロットの飲酒に対する意識の変化は出てきているように感じます。乗務前夜の酒量を控えたり、体調管理によりいっそう気遣っている様子が、日常会話の中で見て取れます。



今後の課題 一つひとつのヒヤリハットを共有。
..... 疲労管理を糸口にさらなる安全向上へ

宮原：安全のためにいちばん大切なのは、目に見える具体策だけでなく、一見地味に見えるような、小さな努力を積み重ねていくことだと思っています。たとえば、直近の例で言うと、ヒヤリハットを上げやすい社風をつくることもその一つ。現場から上がってくるヒヤリハットは、次の策を見つけ出すヒントとして貴重なものです。だからそれを報告したからといって、社員へのペナルティーはありません。ヒヤリハットの意義の浸透と共に、安全に対する風通しの良い環境が整い、その一つひとつを社員同士で共有し、課題を明確化して塗りつぶしていく活動に取り組んでいます。

また、航空事業会社として「疲労管理」も新たな課題と捉えています。疲労の感じかたは人によって差があり、把握しようとする非常に難しいのですが、「安全」を脅かすリスクであることは間違いありません。基礎的な部分も含めて、調査・検討を始めているところです。

取材後記 固定翼・回転翼を合わせて13機を保有し、365日24時間態勢で様々な航空サービスを提供するエス・ジー・シー佐賀航空。同社では毎年12月24日を「航空安全の日」と定め、社員全員が安全への想いを再確認する取り組みも行っているそうだ。